HEADS UP

(2002.1.1)

　つい最近まで、羽振りが良く、豪華な車や生活を自慢していた人がやって来た。 暗い目をして伏し目がち、弱々しげな声で「俺はもう、イヤになっちゃったよ。もうだめだヨ、出来る事なら死んでしまいたい」と、延々とグチとため息を繰り返して帰って行った。私は「情けない事を言うな、苦しい時こそ、胸を張っていなければダメダ！」と叱咤した。

　オーストラリアの強豪チームに、ラグビー留学した人の話が目に止まった。「彼等は相手に弱みを見せることを、決して許さなかった」と言う。ケガをしてもテーピングをしない。息があがっても、手をひざに置いて一息ついたりしない。つらい練習になる程、飛び交う言葉があった。**【HEADS　UP！（頭を下げるな）】**弱点を見せることは、相手にチャンスを与えること。試合中「HEADS　UP!」と言う声が重なり、一つの分厚い「ボリューム」となってフィールドを覆う、自ずと醸し出される空気に震えた。

　私も同じようなスポーツをしていたので、その通りと思った。精神論めくが、苦しい時に、ああもうダメだ、負ける、と思ったり、相手が大きく見え、恐くなり、威圧を感じ、これは勝てそうもないと思うと、必ず負けるものである。 苦しい時は、みんな同じように苦しいのだから、そんな時に、絶対に負けない、勝つぞ！と強い意思を持った時は、大概勝っている。

　先日、息子と雪の谷川岳に登った。私は「行けるところまで行き、疲れたら途中で帰るから、お前は先に行っていいよ。」と言うと、「そんな気持じゃ登れないよ。ここまで来たんだから、頂上を目指そうよ。どんなに苦しくとも、目標に向かって、じっくり登れば登れるから。」と教えられた。先にドンドン行く息子が、途中で立ち止まっては声をかけ、励ましてくれたお陰で、青い氷の山頂に立つことが出来た。帰り道で休憩した時、「お前のお陰で、とても充実した爽快な一日が送れたよ。」と言うと、仕事の話になって「何日も徹夜して、一つの経営戦略を作り上げる。その戦略をどうしても成功させなければならない、と思うようになる。そして、その時絶対に成功させる、という強い意思がないと成功しない。」と話していた。

　ヨーロッパでは**『ノブレス　オブリージ』**という言葉がある。社会的名誉と地位を与えられた貴族には、それなりの重い責任と使命があり、社会の苦境には、決して逃げ出したりせず、先頭に立って勇敢にその使命を果たす、ということである。私の園の子ども達には、この世に生を受け、この社会で生きていく人間として、自らの使命、**自分を活かし、社会のために存分に自分の能力を高め、自己発揮するという使命**を、敢然と果たすような人間に育って欲しいと願っている。必ず、この子たちが作る未来は、もっともっと明るいものになると、心から祈っている。

豊かな人間関係を育てる

(2002.2.1)

FEBRUARY

中央教育審議会の「新しい時代における教養教育のあり方について」の最終答申案は、戦後の経済成長、科学技術の発展が、物質的な豊かさをもたらす一方で、社会全体に閉塞感が漂い、人間関係が希薄化していることへの強い危機感が背景にあると指摘されている。人と人との関わり、人と社会との関わりを、根本的に見直す必要があるとしている。

不登校、ひきこもり、いじめ・・・等が増加している。私達は、豊かな社会を目指し、経済的発展をとげてきた。地域社会では、面倒な人間関係を出来る限り排除し、家族は核化し、家庭の中でもそれぞれが個室に引きこもりがちになった。豊かさを目指すこと自体は間違いではなかった。しかし、どんなことでも、一方が良くなれば、他方でひずみが出てくるものである。そして、そのひずみを補修していくことが必要である。特に人間の〝心〟の問題は、効率化、高速化できるものではない。心の絆、ぬくもり、精神的な豊かさは、手間、暇かけることで深まる。カアさんが夜なべをして編んでくれた手袋であるから、少々出来が悪くても、ジーンとくる。人と関わる力は、面倒であるが、じっくり、様々な人と関わることにより育ってくるのである。多くの人と関わることは、衝突したり、仲良くなったり、どうしたらうまく付き合えるか、どうしたら仲良くなれるか、どうしたらみんなと楽しくやれるか、いつも悩み、心の葛藤が耐えない。

しかし、人間は出来る限り、多くの異なる人間関係の中で育てられることが望ましい。少子化社会では、家庭の中で、おもちゃを奪い合う相手もいない。地域でも、子ども同士が群れて遊ぶ姿もない。今までの教育施設では、同年齢で構成されるので、異年齢の集団はなかなかできない。年長者をモデルにして、年少児が、人として生きていく上で大切な事を学んでいく。年上の者を敬うこと、集団のルールを守らなければならないこと、仲間を守ること、仲間を裏切ってはいけないこと、下の者には優しく指導しなければならないこと・・・。異年齢の中でしか育てられないことがある。

異年齢集団がなければ、異年齢が関わる場を補ってやらなければならない。異年齢のクラス編成にするとか、異年齢のクラス同士を一緒にする時間を持つ、などの配慮が必要である。何かを早く教え込んだり、出来るようにさせるには、出来る限り同程度、均質な集団の方が速いし、効率的である。異年齢の集団は、自分の子さえ良ければ良い、効率的に教え込んだり、子ども達を一斉に揃って動かす、という考えには合わない。しかし、異質で不均等な、いろいろな人間がいるのが、社会の自然な姿である。私達は、あまりにもスピードと、効率性を求めて来てしまったのではないでしょうか。もっと人間性豊かな集団の中で、子ども達が育つようにしなければならないと思う。

ゆとり

(2002.3.1)

MARCH

北竜台の幼稚園では、今年の作品展は、クラスごとにテーマを作り展示しました。各テーマに沿って、お腹の中で遊べるプーさん、牛乳パックでできたレンガの家など、子ども達が協力して大きな製作をしました。子ども達は｢今日はここまで作れた｣と、毎日少しずつ製作しました。途中で壊れたりして、いろいろ試行錯誤を繰り返し、工夫しました。楽しそうに協力し合っていました。少しずつ出来てくることが嬉しそうでした。やっと完成した時、子ども達は達成感に輝いていました。しかし、作品展の後、あんなに苦労して作り上げた共同製作物で充分に遊び込めたか疑問です。直後に発表会を控えていて、作品展の後はすぐに発表会の準備に取り掛からなければなりません。子ども達は、そんなことを全く気にしないかの様に、元気に遊んでいましたが、大切に作ってきた作品を壊すのはなんとも悲しいし、心が痛みました。発表会をカットしてしまうか、内容を縮小してしまえば良いのですが、それが中々できません。

先日、全国の国公私立幼稚園の園長、設置者を対象にした研修会で、幼稚園の教育はどうあるべきか、という話をする機会があり、私は、「幼稚園は子どもが主役であり、子ども達のものであるから子ども達の為に、私達は、何ができるか、そして、子ども達の為になるのは何か、深く考えなければならない」と訴えました。そして、「遊びを充実させ、子ども達の生活を生き生きとしたものにしなければなりません」とお話しました。その日の夜の懇親会の席でのことです。私は著名な幼児教育者から、｢浅田先生の言っていることはその通りだが、言っているようにはやっていないと思う。先生の言うようにやっていたら、私立の幼稚園は成り立たない。｣と言われました。胸にグサリときました。私は、確かに理想通りにできないことにイラ立つことがあるので、反論できませんでした。

その後しばらくして、園児募集をすると定員の二倍も三倍も集まると豪語している幼稚園の園長と話す機会がありました。その園がどういう保育内容か、興味を持ちました。内容は、育児不安につけ込み、こうすれば競争に勝つといった、内容のない軽薄な英才教育と、徹底した父母へのサービス（子どもへのサービスではありません）です。幼児教育界では、数十年前から批判されているマーチングやフラッシュカードに、親は｢泣いて｣喜ぶと言うのです。そこでの子どもは、大人の言う通りに一所懸命動き、素直で、健気です。そこに至った『結果の健気な姿』に親は泣くのだと思います。しかし、決して子どもは自発的、自主的、主体的に行動しているのではないと思います。『そこに至る過程での姿』を見たら、親はもっと泣くのではないかと思います。

私達は、大人の都合で、子ども達の生活をセカセカさせていないでしょうか。｢ゆとり｣と言いながら、実体はとても忙しくなっています。子ども達の人格形成には、自主的で主体的な遊びが欠かせません。ゆったりとした時間の流れの中で、じっくりと遊び込ませてあげたい、と心から願っています。

失敗は成長のもと！

(2002.4.23)

やる気を育てる（その1）

トイレから出て来たら、扉のところで待っていた子に拍手をされた。小便をして誉められたのは、生まれてこのかた初めての経験である。実は、前日2歳になるのに相変わらずオムツをしているその子を連れて、トイレに入った。まず、私が手本を見せ、やらせてみた。洋式便座に逆向きになって座り、初めて自分の意思で、自律神経を働かせ、小便を成功させた。私は、よくぞやったと賞賛の拍手をし、抱きかかえて「やったぞ！」とばかり、高い高いをした。本人もニコニコと相当に気分が良かった様である。

近頃は、オムツを取るのが大変遅れている。紙オムツが非常に良く出来ている。オシッコ、ウンチをしても、水分を吸収してしまい、親子ともあまり不都合、不快感を感じないようである。おもらしをしてパンツを汚し、雑巾を手にタタミや廊下を這い回らなくて済む。オムツの中に溜まったら、そのままポイで手間がかからない。この手間がかからないことが問題なのである。

人間の心や体は、元々手間ひまがかかるようにできている。手間ひまかけないとおかしくなる。大小便のコントロールは、自律神経に関わる。自律神経失調症になると、大人でも漏らしてしまうことがある。自分の体を自分でコントロールすることは、自分で自分を律することである。ここらに現代の子どものおかしな現象の一端があるような気がする。いつ垂れ流しても平気であるなら、神経を使う必要はないのである。しかし、人間は 失敗しなければ成長しないのである。失敗は成功のもと、と言うが、失敗は成長のもと、なのである。

最近、気になることがある。何か、初めてのことになると、「やったことがないから･･･」「習った事がないから･･･」と尻ごみする子が多くなった様な気がする。やってみなければ、できるようにはならない。大概のことは、やっている内に出来る様になるのである。

失敗は成長のもと！

(2002.5.31)

やる気を育てる（その2）

学力低下が問題となっているが、最低限の基礎学力があり、学習意欲 —— やる気さえあれば、必ず伸びる。人間の【根っ子】の一部である意欲を育てることが大切である。その意欲を育てるには、まず子どもにやらせることである。何でもしてあげてしまうと、子どもはいつも受身になって、自分でやろうとしなくなってしまう。人を木偶の棒（無能）にするのは、簡単である。何もさせず、何でもしてあげてしまえば良いのである。

「この子はまだ出来ない」「この子には無理だ」と言って子どもにやらせないのは、本当は子どものことより親の都合を優先させているからではないか。子どもにやらせると、後の始末が大変だから、ということがあるのではないかと思う。トイレット・トレーニングだってそうである。パンツにさせて失敗され、後始末する方が大変である。それより、紙オムツにして、まるめてポイッとする方が楽である。ハシを持たせて食べさせるより「アーンをして」と言って、口の中にスプーンで突っ込む方が、散らかしたり汚されたりする事がなく、都合が良いのではなかろうか。

子どもが自分の意思で自分でやろうとする、やる気、意欲が大事なのである。そして、何度も失敗して、ついに出来た時、「僕は出来るんだ。やれるんだ」という満足感、喜びを感じる時、自信、自尊の感情を持つようになり、意欲を育てるのである。何事も、「やってみなければ、やらせてみなければ、出来る様にならない」のであるが、どんなことでも、初めから出来ることはない。トイレット・トレーニングだって初めは何度も失敗するでしょう。しかし、失敗して汚してしまっても、「やろう」という意欲（やる気）を持って「やる」ことが大切である。

問題なのは、失敗した時、親がどういう態度でいるかである。失敗した時こそ、やる気を育てるチャンスである。失敗した時に「何をやってるの、バカ！」「どうせ出来っこないのだから、何でもやりたがらないの！」などと怒鳴りつけては、子どもは失敗しないようにオドオドするようになってしまい、消極的で、意欲のない人間になってしまう。結果の良し悪しでなく、やろうとしてやったという過程が大切である。

そして、失敗した時は、「失敗して悔しいね。上手に出来ず残念だね。」と悔しさを共有して、再びチャレンジする意欲を育てたい。「お母さんも何度も失敗したの、よくやったわね。もう一度やってみようよ。今度は上手にできるかも知れないわよ。そして、必ず上手く出来る様になるから。」と励ます事である。結果の良否でなく、自らやろうとして、やりとげたことを誉めることが、励ましとなり、新たなやる気を起こさせることになる。「チャレンジして失敗することを恐れるより、何もしないことを恐れよ！」と本田宗一郎が言っている。失敗を克服して成功につなげる、やる気のある人間を育てたいと思う。

望ましい生活習慣

(2002.7.1)

2才になる隣家の子を自転車に乗せて、出かけました。お花がいっぱいの家の前で、「お花がきれいだね」と言うと、「お花が、キレイネ」と言いました。坂道を登る時、「うんこらしょ、どっこいしょ」と言うと、同じように「ウンコラショ、ドッコイショ」と一緒に力を込めてくれました（彼が力を入れても、ペダルが軽くなるわけではないのですが・・・）。坂を下り、スピードが増していき風を切る時、「わー気持ちいい、涼しい！」と言うと「キモチイイ、スズシイ！」と言いました。行き交う人、畑で農作業をしている人々に、私が「こんにちはー」と挨拶すると、もっと大きな声で「コンニチワー」と言いました。何でも私の真似をしていました。私は急に思いました。あれっ！この子はこんなにおしゃべりできたかな？と。今まで、一度も声を出して挨拶したことがありませんでした。時折、コクリと頭を斜めに倒すだけでした。

幼児期は、人格の基礎作りの時代です。根っ子の時代です。そして望ましい基本的生活習慣を身に付ける時代です。私達は一定の時間に、朝起きて、顔を洗い、朝の挨拶をして、食事をし・・・と、日常行う行動を習慣化し、その習慣化により、心も身体も安定し、特別の努力や決意をしないで、心地よく生活します。これが基本的生活習慣です。このリズムを身に付けていないと、不快な生活をすることになります。

望ましい生活習慣を身に付けるには、2つのことが最も大切です。1つは、親や身近な人がモデル（手本）になることです。生活習慣は決定的に親が影響します。早寝早起きの習慣は、夜更かしの親からは決して生れません。一定の時間に家族が揃って一緒に楽しく食事をする家庭の子どもは、きちんとした食生活をします。子どもだけの孤食、いつまでもダラダラ食べさせている家庭、お母さんがじっとしていないで、立ったり座ったり、お父さんがテレビを観ながらでは、子どもは落着いて食事をするようにはなりません。お母さんが気持ち良く挨拶をしていれば、必ず挨拶をするようになります。子どもはモデル（手本）通りに生活します。それが生活習慣になります。2つ目は、子どもが望ましい生活をすることが「心地よいと感じること」です。自分の好きなことをする為には、準備や片付けを一生懸命にします。片付けが嫌いでも、自分の好きなものは大切にします。物が溢れ、玩具を買い与え続ければ、物を大切にしません。本当に必要なもの、ずっと欲しいと思っていたものは大切にします。「しつけ」たい行動だけ取り上げて、うるさく注意してもダメです。「さあ、お母さんと一緒に食事の用意をして、一緒に楽しく食べましょう」と、準備するとか、「おはよう、という君の挨拶は気持ちいいね・・・、君のお陰で今日はとても気分がいいよ。」と誉めれば、子ども自身も楽しくなります。「教える」よりも、子ども自身が「快適」になり、そうした方が良いと思う「必要感」や、よい結果を「共感」することです。

みんなで子育てすること

(2002.8.1)

【H12年2月の広報誌掲載文】

昔は、どこの町内にも口うるさいおじさんさんがいた。そして若者は、素直にそういう人の言うことを聞いた。しかし近頃は、そんなこと言っていられない世の中になった。若者に注意しようものなら、命の保証もない。そして私は最近、町に出掛けるのが嫌になってきた。

友人に誘われて出掛けた。夕方の通勤時間帯なので、電車は混んでいた。立っている人が大勢いるのに、四人分の座席にサラリーマン風の二人の若者が、横にカバンを置いて座っていた。二人がつめれば、あと二人は座れそうなので、「スイマセン、どちらかにつめて下さい」と言うと、不機嫌そうな怖い顔をして無言で体をずらした。取手駅の改札を出ると、人食い人種のような山ん婆高校生が、パンツ丸見えで、駅の階段のところに座っていた。「パンツ丸見えだよ！」と注意すると、「どうもすみません」と、注意のお礼が返ってくると思いきや、「スケベ、ジジイ」と言ってきた。「みっともないよ！」と言い返したが、空しくなった。地下道を通って東口にでると、大きな体をしたオニイさん達が、缶ジュースや缶ビールを手に車座になって地べたに座って、道路をふさいでいた。通行人は誰もがみんな、道路の端に避けて通っていた。私も、関わり合いにならない方がよいと思って、同じように横を通りすぎたが、通り過ぎてから、注意もせず黙って通りすぎることに後ろめたさを感じた。胸をドキドキさせながら車座のオニイさんのところに戻って、「ここに座っていられると、通行の邪魔になるから、端によけて座って下さい。」と注意した。すると「ナンダ　コノヤロー！」と一人が立ちあがった。最近の事件のことが、咄嗟に頭に浮かんだ。危ない、と思ったので、「他人の迷惑になるんだ。」とか、何とか言って、その場を立ち去った。立ち去りながら、「堂々と自然に歩け」と自分に言い聞かせながら、足早になっていた。どうしてこんなになってしまったんだろう。私は段々この社会が、日本が、イヤになってきた。

家庭の教育力がなくなった、地域の教育力がなくなった、と言われる。ちょっと昔には、子どもは、大家族や地域の中で育てられた。地域の中には、口うるさいおばさんやおじさんがいて、社会のルールやみっともない恥ずかしい事はしてはいけない事等々を、厳しくしつけられた。その分、親は楽だった。親がやらないことも、祖父や兄弟が、さらに近所のおじさん、おばさんが子どもを躾てくれた。悪さをすると叱ってくれたし、良い事をすれば誉めてくれた。人に迷惑をかけてはならない規範を学んだし、人に迷惑をかけなくとも、格好良く生活する事、恥ずかしくない立居振舞い、礼儀作法を学んだ。女子高校生が恐ろしい化粧をすることは格好悪いことだし、若い人が地べたに座ること、しかもパンツが見えるような座り方をするのは恥ずかしい事であるという社会的コンセンサスがあった。だから、そのコンセンサスからはずれれば誰もが注意した。しかし現代は『人に迷惑を掛けなければ、私の勝手でしょ』と言って、なんでも自由でやりたい放題で、そのことがかえって、生活をしにくくしている。子育てにしても、自己中心的で、自分の子どものことに関しては、他人からの口出しはさせないようになっている。

みんなで子育てした方が楽しいし、楽なはずである。

仕付けはあいさつか

(2002.9.2)

◆　あいさつはコミュニケーションの基本

　幼稚園に通っている子ども達の親からは、「ふたば文化幼稚園の子ども達は、きちんとあいさつする子が少ない」と言われることが時折あります。しかし、卒園していった子ども達の親からは、「登下校の際や、町の中で、ふたばっ子はとても気持良くあいさつをしてくれます。」と言います。どちらも真実であると思います。バスで通園していると、キョーツケをして、先生が「ごあいさつ、どうぞ」と言うと「先生さようなら、みなさんさようなら」と儀式の様にあいさつをするのが、日本のどこでも見掛ける幼稚園の風景です。あいさつは、心からするものであって、最も基本的なコミニュケーションです。大人の掛け声がなければ、あいさつできない、形式的なあいさつより「オハヨー！」と心から発する明るいあいさつができる子にしたいと願っています。儀式ではないあいさつができるようにする為、気を配っていると、命令や掛け声がなくてもあいさつできるようになるので、卒園していったふたばっ子は、あいさつができるといわれるのだと思います。

◆　あいさつは心を開いてするもの

　幼稚園の時はあいさつができたのに、小中学生になると、あいさつができなくなる、と言う声をよく聞きます。大人の掛け声であいさつをしていれば、掛け声がなければあいさつしなくなるのは当然であるし、大きくなるにつれて恥ずかしさを感じることもあるでしょう。しかし、幼児期から習慣になっていれば、思春期になってもあいさつできるようになります。

◆　仕付け

　しっかりとあいさつできる子を見て、「あの子は育ちがよい」と言われる。育ちが良いとは、良く仕付けられていることを意味します。仕付けられるのは、決して押しつけられる事ではありません。親子、教師と子が、しっかりと信頼関係を持って、心の絆を結んでいると、心を開いて素直にあいさつするようになります。その第一歩が、親子でのあいさつです。まだ言葉もできない頃から、両親が「おはようございます」から「おやすみなさい」まで、あいさつの言葉かけを毎日毎日繰り返していく内に、子どもはその言葉を模倣（まね）していきます。しかし、模倣するのを待つだけでは、仕付けはできません。繰り返し、繰り返し、言葉をかけ、あいさつをうながす必要があります。

◆　躾

　「人間」とは、人と人との間、「世の中」という意味です。「あいさつ」ができるようになるのは、子どもが「世の中」に入っていき、「人間」になっていく最初の営みです。子どもは生まれた時から、じっと親を見つめて育っていきます。幼児期は模倣の時代です。親を見て、親を真似ながら成長していきます。言葉と行為は一体であり、言葉と行為は「まねる」ことから身に付き、子どもは人間として成長していきます。あいさつができた時には、「よくできたね」と褒めてあげる。これらが自然にできるようになると、躾となって、子どもの身体に付いていくのです。

春の香り

(2002.10.1)

★秋分の日に、原稿を整理していたところ、こんな文章が出てきました。10年近く前の早春のものです。こういう生活に戻さなければいけないと、秋分の日に反省を込めて、再掲させて頂きます。

先日、こんな話を聞いて、胸がキュンとした。「幼稚園で折った折り紙を、仏壇のおばあちゃんに飾りました。お母さんが仏壇のろうそくに火をつけました。ろうそくの炎が風に揺らぎました。その時、『あっ、おばあちゃんが笑った』と女の子が言いました。仏壇の中の写真のおばあちゃんが、笑ったようにみえたのでしょうか。お母さんは、それは炎が風に揺らいだからなのよ、とは言わず、『そうね、おばあちゃんが喜んで笑っていたわね。』と言いました。」

私は、この話を聞きながら、子ども達と土手に散歩に行った日のことを思い出していた。太陽が燦燦と輝き、気の早いチョウが土手の草花の間をヒラヒラと舞っていた。チョウを追いかけていると汗ばむくらいだった。土手を南側に下りると、河川敷では、おじいちゃんとおばあちゃんがお花畑で花を栽培していた。私が大きな声で「コンニチワー、ゴクロウサマデース」と声をかけると、子ども達も一斉に、私のまねをして「コンニチワー、ゴクロウサマデース」なんて、挨拶をした。おじいちゃん、おばあちゃんも作業の手を休めて、「コンニチワー。元気デ、イイコダネー」と、ニコニコと、挨拶を返してくれた。お花畑の花が一斉に咲き始めていた。春まだ浅き利根川からの川風がそよそよと、お花畑の花を揺らしながら渡ってきて、ほてった頬に心地良くあたった。

ふと気付くと、畑より一段高くなっている小道の端にしゃがんで、お花畑に向かって顔をあげている子がいた。何をしているのかな。私は、その子の顔をのぞき込んだ　その子は、うっとりと目を細めて、顔を風に受けていたのだ。すぐに私に気づき、目を大きく開けて言った。「園長先生、今日の風はとてもいい臭いがするよ。」私もその子の隣にしゃがんで、鼻の穴を風の方に向けて顔を上げた。かすかではあるが、確かに良い香りがした。みんな、小道の端に一列に並んでしゃがんだ。「本当だ。甘い風だ」「お風呂の臭いだ」なかには「トイレの臭いだ！」などと言う子もいた（トイレの芳香剤のことだろうか）。私は「これはお花の臭いだよ」とは言わずに、「本当だ。良い香りの風だね」と言って、しばらく子ども達と香りを楽しんだ。お花畑から少し行くと、また南側の土手の斜面に出る。そこは陽の光を浴びて、もう青々と草が茂っている。草のしとねに子ども達と寝転がり、目を閉じた。ムッとするほどの草いきれ。今度は「園長先生、草の臭いがいっぱいだね」と言う。目を開けると、青空にゾウやキリンの形をした雲が気持よさそうにゆったりと流れていった。私が「アー」と声を出して背伸びをすると、子ども達も「アー」と声を出して背伸びをした。

感動するとは心が動くことだ。共感するとは、心と心が触れ合うことだと思う。こういう光景は、日常どこにでもある。しかし、お互いの心の一瞬の動きを知るには、私達はあまりに忙しすぎる。急ぎすぎる。忙しいとは、心を亡くすと書く。

香りのよい風を胸一杯吸い込んで、のんびり、ゆったり暮らしたいものだ。

連絡帳より

(2002.11.1)

NOVEMBER

今月は、連絡帳に書いてくれた文章を載せさせて頂くことにします。 子どもと一緒に幼稚園生活と、子育てを楽しんでいらっしゃる姿がほのぼのと伝わってきます。

10／6（日）今夜は、昨日の運動会について、語り合いながら二人でバーボンを飲んでいるところです。主人の発言を是非T先生に伝えたくて、失礼ですが飲みながら書いています。主人は、あんな幼稚園があったら自分も行きたかったと申しております。

大地踊りについて・・・年長になったらこれをやるんだ、というステイタスになっていて、皆胸を張って、これを踊っているんだ、という自信と喜びになっているようだ、それと私の感想・・・先生の先導だけでなく、子ども達だけの力で輪を作るシーンは素晴らしかったです。リレーについて・・・プログラムの構成がうまい！午前中、年少、年中、年長とすすむ盛り上がりが良い、と言っております。リレーのような競技は、自分達の時代にはなかった。

Ｍ子（自分の子）は、ほとんど前の人がいない状態で一人で走っていた。私は、「わぁー、一人女の子が遠くからゆっくり走るわ・・・」と思ったら、Ｍ子だったのですが、本人の感想は、「リレー楽しかった・・・」と言いました。主人は皆で走ることが、遅くても速くても子供心に伝わるものがある、そんな競技なんだと思う、と勝ち負けでなく、懸命に受け継いでいく充実感があるのでは・・・やっている時より、終わった後の方が、伝わるものがある、素晴らしい競技だ、渡すものがリングだったが、競技そのものが輪（和）だと・・・代表だけ走るのではなく、クラス全員が走る、というアイディアは素晴らしい、先生方もご苦労は多いだろうが・・ということを、私が書き切れない程、言っております。主人の言葉、もっといい事、いっぱい言っているんですが、私の速記が追いついていきません。どうしてもT先生に伝えたくて、こんな字で書いています。スミマセン。

自分達の頃の幼稚園の運動会、何をやったか印象が少ないが、きっとこの子達は一生思い出に残る大地踊り、リレーだ！（主人）。Ｍ子は走りはマイペースですが、踊りは得意。間が離れすぎた男の子を引っ張るとことなどありました。踊る前、Ｃちゃんが、係りとして働いているお母さんの姿が、チラチラ見えるからか泣いていましたが、涙を拭いてあげたり、トントンたたいて励ますＭ子の姿もあり、運動会とは、日頃の力を全て発揮できる日」ですね。　正に・・・。 又、母親達も応援では一つになり、皆声がカラカラでした。私の声は仕事で鍛えたので大きいですよ！それからフォークダンスの時の園長先生、とってもステキでした・・。お伝えください。 この幼稚園の良さ、親に伝わり、姉弟、二人目、三人目と入園させるんだろうな、と主人が言っています。文集に投稿したい程のことを、主人はだーーーっと話すのですが、薦めると、「いや、自分の心の中に残っているからいいんだ」と言います。残念なので、T先生には伝えようと思います。前の夜から席をとる家に比べ、我家は準備でギリギリになってバスに乗り、土手に場所を取り、出番がくると一番前に行き、大声で応援する、というパターンでした。今回はビデオもカメラも持たず、園にお任せし、手放しで応援に専念しました。

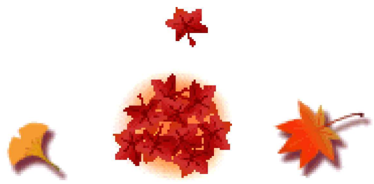
最後に父より

　一人一人、子どもの目線に立って、どの子にも親がするように皆に同じに接すること、抱きしめる姿に、来た～～～と・・・。そんな先生に出会えて良かった。

私より

　"大地踊り"のまめしぼりを渡す時、ただ配るだけでなく、一人一人に声をかけ抱きしめるシーン、ひどく感激致しました。やっぱりマスカラぬらなくてよかった。本当に素晴らしい運動会をありがとうございました。残りの幼稚園生活、主人と仕事の調整をしながら、参加したいと思います。主人は弟達もふたば文化幼稚園にと考えております。乱筆、申し訳ありません。生の声でした。

追加：騎馬戦での出来事だそうです。Ｍ子は勿論あの性格で、自分から帽子を取ろうとするタイプではありませんから、主人が懸命に逃げる方だったそうですが、うさぎ組で一緒だった子に取られたそうです。競技が終わった後、その子とＭ子が会話、Ｍ子が只うなずいているシーンを主人が見たそうです。帰ってから何を話していたのか聞いたところ、その子はＭ子ちゃんの取るつもりはなかった、というような内容のことを言ってそうです。面白いですね。私達母親も、９月末、クラスの飲み会があり、１０人以上集まり、夜中１：00過ぎまで盛り上がったんです。



子どもは風邪の子?

(2002.12.1)

　昔の、ふたば文化幼稚園を知っている方々からは「ふたばっ子と言えば、真冬でも裸で乾布摩擦・体操と、薄着で元気に遊んでいる姿が連想されたが、近頃は長ズボンと厚着ばかりが目立つ。園長先生も信念が揺らいで、徹底しなくなったのではないですか？」と、言われる事が多くなりました。信念が揺らいでいるわけではないのですが、徹底できなくなったのは確かです。薄着を奨励しているが、決して強制していませんので、保護者の皆様のご協力がないと徹底できないのです。

　ふたば文化幼稚園は、子どもの『遊び』を大切にしています。とりわけ、外遊びを重視しています。先生方も率先して、半袖で子ども達と一緒に遊んでいます。ふたばっ子は非常に活動的です。しかも、幼稚園は日当たりが良く、天気の良い日はポカポカして、本当に温かいのです。ご家庭にいる時は、幼稚園にいる時ほど活動的ではないでしょうから、真冬に汗をかくという事はないでしょうが、園庭で遊んでいる厚着の子の背中に手を入れると、汗をびっしょりかいています。子どもは、脱ぎ着をしなさいと、いくら声を掛けても夢中になって遊んでいるときは、着ているものを脱いだりせずに遊んでしまいます。特に、タイツや長ズボンの着脱は難しいです。

　人間の体は、環境に順応して自然に体に害となる、暑さ、寒さに対して抵抗する力を蓄えます。寒い時は汗腺をギュッと引き締め、熱を奪われないようにします。逆に、暑い時には汗腺をパッと開き、熱を外に放出します。この体温調節機能は６歳ぐらいまでに出来上がってしまうそうです。ですから、幼児期に、夏はクーラー、冬は暖房の中で、一年中全く寒暖なく生活していると、暑さ・寒さに弱い体に育ってしまうことになります。

　最近は冷暖房完備を売りものにする幼稚園が多くなっています。又、文部省も公立学校にエアコンを設置する方針を出しました。室内を冷やし、熱を室外に放出することになります。子ども達はますます外で遊ばなくなります。エアコンを付けるより、自然環境を守り、豊かな自然の中で子どもを育てることの方が大切ではないでしょうか。子どもの体温は大人より高いのが普通で、子どもを抱いたりするとホカホカして温かく感じられます。しかし、最近の子ども達は体温が低く、大人と変わりないということです。やはり、子どもは『風邪』の子ではなく、子どもは〃風〃の子で、寒風をものともせずに、元気に外で遊べる子であって欲しいと願うのです。